



Title	<研究活動報告>スラブ研究施設図書室報告(1971) : 大学図書館の集中管理体制をめぐって
Author(s)	秋月, 孝子
Citation	スラブ研究, 16, 280-286
Issue Date	1972
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/5025">http://hdl.handle.net/2115/5025</a>
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000112954.pdf



[Instructions for use](#)

## スラブ研究施設図書室報告 (1971)

～大学図書館の集中管理体制をめぐって～

秋 月 孝 子

かえりみれば昨年の後半から今年の前半にかけての約一年間は、北大附属図書館と法学部図書室との統合問題の嵐の中に過ぎ去った。法学部図書室の中に機構上内包されるスラブ研究施設の図書室も、統合問題を当施設の研究体制にもかかわる自分たちの問題としてとらえざるを得ない立場におかれた。このような中で大学図書館の改善策というスローガンの下になされている種々の討論を、図書職員としての問題意識から再考してみたいと思う。大学図書館の改善策はいろいろの方向に、即ち政府とか、大学全体にも求められるであろうが、ここではそのような広範囲な議論の展開をさけて、図書の集中管理体制の問題に焦点をおきたい。なぜなら昨年来まだ決定をみない附属図書館と法学部図書室の統合問題は、ひいてはこの文系諸学部図書室の統合問題を予測せしめ、これは文系図書の集中管理体制を前提としていると思われるからである。

大学図書館の本質的機能の二つの柱といわれる研究図書館的機能と学習図書館的機能が十分に果されるためには、図書の集中管理体制か、分散管理体制かが議論されはじめて久しい。大規模大学図書館においてはたしかに図書の集中管理体制は多くの利点をもたらすにちがいない。例えば次のような点を指摘できよう。(1) 予算の合理的な行使。部局図書室制度が陥りやすい蔵書構成上の欠落を補い、図書の発注・受入を一本化することによって重複をさけて無駄な支出を少くする。(2) 仕事の能率化。各部局毎に重複する単純な仕事を機械化し、固有の専門分野をもつスペシャリストが図書整理に当ることにより、類似した問題処理への時間の浪費を防ぐ。(3) 情報サービス機能の強化。集中化の所産として生まれる正確な資料にもとづいて情報サービスを円滑に行うことが出来る。(4) 図書の共同利用態勢の確立。利用者が各自の研究室にひとたび本を入れるとそこに定着し、他の利用を妨げるが、集中化によりそれを防ぐ。上記のような集中管理体制による効果が実際に生ずるためには、利点の本質を分析し、それを裏付けるものを見定めねばならぬ。中央集中制の真価としてかかげられているどの点をとってみても、現在の図書館の質的改善と、図書館職員の高度の知識・能力が前提となっているのであり、それらがなければ図書の集中化は単なる機構のマンモス化に終るのではなかろうか。

次に現存する部局図書室のあり方を附属図書館との関係において考えてみよう。部局図書室と一口に云ってもその型はいろいろあるが、現在の北大の場合、各部局図書室が教官の希望により図書を購し、整理し、管理は各部局の事務長が行うことになっているが、法・文・経・教育の各学部の図書は附属図書館の書庫に収められることになっている。(文科系学部のうち全面的に図書が附属図書館の書庫に収納されているのは法学部のみで、あとの他学部はそれぞれの方法において半分以上の図書が学部の書庫又は教官室におかれているのが現状である。)この事実は事務長の図書の管理権が形式的なものにすぎない事を示している。他方自然科学系学部は同一キャンパスにありながらも(水産学部をのぞ

## 《研究活動報告》

く)、 附属図書館と距離的にはなれているためもあって、 図書が学部・研究所又は学科の書庫に収められているもの、 更に教官室に置かれているもの等その存在形態は多種多様であるが、 図書の管理責任者が名実共に事務長である点においては共通性をもつ。 各部局図書室受入の図書は部局毎の物品番号がうたれると共に、 附属図書館の全学一本化された登録番号が与えられ、 図書カードはすべて附属図書館に送付することが義務づけられ、 そこでは全学の総合目録が完備される仕組みになっている。

現在のままの部局図書室制度は、 今村前図書館長をして「……事態を更に悪くしているのは、 比較的設備の整った中央図書館の外に、 学部・研究所毎の不完全な部局図書室がありその間の連絡が至って不十分なことである。 このため決して豊かとはいえない人と金の浪費を生じ、 それが大学図書館機能の一層の低下をもたらしている」(『大学基準協会』会報、 第21号、 昭和46年。「大学図書館に関する改善方策について」今村成和。 p. 5)と慨嘆せしめている。 しかしながら部局図書室というものは中央図書館が総合的であるのに対し、 多分に専門的な性格をもつものである。 部局図書室の図書が専門分野に限られた主題範囲に重点がおかれ、 利用者がそれぞれの専門家であるとするれば、 それらの図書を整理するためにも、 サービスのためにも、 その仕事にたずさわる人々は専門分野に関する相当の知識が要求され、 専門資料に関しては利用者と同じレベルで話すことが望まれるのではなかろうか。 それと同時にその立場におかれた人は、 固有の専門的知識を根底として組織される資料の分類・目録・情報の蓄積等の理論と、 それを実用する技術を獲得せねばならぬ。 単なる経験の蓄積で事足りる時代は去っている。

附属図書館は中央集中制のもたらすであろう既成の理念の下で、 部局図書室がもたねばならぬ専門的要素をどのような形で受けとめる用意があるのであろうか。 私が身近かに接する教官・研究員が図書館及び図書の仕事にたずさわるものへの要求はきびしい。 なぜなら彼らは外国のすぐれた大学図書館や文書館を多年にわたって利用して来た人達であり、 大学図書館のあるべき姿を適確に把握しているからである。

現状の中から資料の集中制の利点、 部局図書室のあり方を概観したが、 大学図書館の本来的機能とは何であるかを考えることにより、 図書の集中管理体制の問題提起に一つの方向を与えたいと思う。 この問題は附属図書館機構の附随的・末梢的なものではないのであるから、 直面する大きな課題として長期的展望に立って解決しなければ悔を千歳にのこすことになる。

図書館の機能はコミュニケーションの伝達機能を中心に教育・研究活動に効果的に役立つことであり、 コミュニケーションの伝達は、 色々の形で習得された専門的知識にもとづいて、 組織化された記録類を利用者に提供することである。 この伝達機能を有効ならしめるものは「情報の確実さと迅速さ」である。 図書館機能を一義的に規定するものは教官及び学生の図書館利用の態度である。 どのような資料の収集、 どのようなサービスを要求するかは大学を構成する集団によりことなる。 たとえば一般教育と他の専門分野の研究とでは資料の内容と形態においても異なってくる。 大学図書館では、 資料整理の中心が著者・書名目録の作成にあったが、 次第に主題接近の傾向へと高まりつつある。 図書館機能が従来の保存レベルから教育・研究レベルへと移行してゆくなれば、 図書館も専門図書館の統

合されたものとしての形態へと変らざるを得ないであろう。したがって図書の集中化の問題も大学図書館の機能のあり方と関連づけられるのであり、資料の「主題編成」による部門化としての組織の合目的性即ち有効性が重要な関心となってくる。「機能編成」上、受入・整理機能を中心に考えるならば集中化は能率的であり、「主題編成」を中心にするならば大規模図書館においては資料を専門別に分散せざるを得ない。しかし人文・社会科学における資料統合の一本化はそれ自体多くの困難をとまなわないように見える。例えばスラブ研究施設の研究内容と研究資料の性格から考えると、図書の集中管理体制は多くの有効性をもたらす。研究内容が、スラブ地域という地理的ブロックを中心に、社会・人文科学の両部門にまたがっており、資料としての図書も学部相互間のものを広範囲に必要とするからである。スラブ研究施設では、附属図書館と法学部図書室との統合問題、ひいては文科系資料の集中化の問題を大学図書館の本来の機能を有効化ならしめると同時に、合理的研究上の要請として考えている。ここにおいてスラブ研究施設は、附属図書館の長期的計画の上に立った「主題編成」にもとづく、図書資料の集中化の一段階としてスラブ部門の設置を提唱する。これは主題専門化の概念に基くものであるが、理論上は記述目録作業や受入作業等は統合化し、資料の内容を扱うレベルの技術プロセスと、本来このレベルをとり扱うレファレンス即ち情報サービスとを総合化することが望ましい。ここでは主題別の専門家を配置して合理的資料の収集や、主題別目録の編成、専門的索引作成作業等その他の情報サービスを能率的に行なうこととする。このような体系化の実現はきびしい条件が前提とされており、その前提が十分に充されなくては大学図書館の諸問題は依然として未解決のまま残り残されるであろう。

ここでは資料の集中管理体制をもっとも有効ならしめる前提として、管理組織の変革と組織の中のスタッフ即ち図書館職員の質的基準の二つをあげる。大学図書館の機能は管理組織に裏づけられているから、管理組織を大学図書館機能の手段と規定することによってのみ片づける訳にはゆかぬ。いかに「組織とか機構よりも人が大切」と主張しても、管理組織を明らかに分析して、大学図書館機能に有効に奉仕せしめるように方向づけなければ、その中にたとえどんな有能なスタッフを配置しても、その位置づけの意味を失なわせることになる。管理組織は組織の目的に直結するものであり、管理組織によって、組織の有効性が決定されるという重要な要因であるが、ここにその問題を分析する余裕はないので、附属図書館の管理組織改革の必要性を指摘すると共に、附属図書館が資料集中化を学部図書室の単なる吸収という形でなくずし的に行う前に、管理組織改革の根本的志向性を明白にすることを希望するにとどめたい。

もう一つの前提となっている図書館職員の問題は、自分自身を含めてきびしく告発されねばならぬ。図書館職員が高度の専門的知識、数ヶ国語の言語理解能力、有効な資料操作能力等を要求されるのはあらためて云うまでもない。大学図書館の機構改革は図書館職員の専門職制の確立とも密接に結びついているように思われる。図書館職員は専門性のきびしい内的基準を自らに課すべきである。専門職制の確立を困難にしているものは、現在の図書館職員の質的内容ではなかろうか。少なくとも大学図書館の司書は、大学教育の四年間を最低の一般教養の期間とし、ついで正式な図書館学教育のための学校を卒業し、高度の

## 《研究活動報告》

基準の資格認定試験を受けるように義務づけられ、その上自分の専門とする研究分野をもってたえず努力することが望まれるであろう。これらを最低限度とする資格基準に立って司書が図書館という社会的公共性の中で、いかなる姿勢と役割を示すならば professional と主張しうる可能性をもたらすか、さぐりあてねばならぬ。専門職としての司書の内容は、資料の単なる提供者としての立場から、主体性ある資料の調査や研究を志向すること、更に学問の専門的知識を資料の形態において組織化する理論と標準化された技術を習得することの両者が相俟って形成される。かくして司書職が専門職としての質的基準をきびしく律して行くなれば、他の一般行政職にかかわることの出来ない固有性もみとめられてゆくであろう。

最後に試論的結論を簡単にまとめてみよう。これはあくまでも図書の集中化をめぐる問題の考察過程における所産としての限られた結論にすぎない。

図書館の管理組織の変革と組織の中のスタッフの質的基準をふまえた上でなければ、単なる資料の集中管理制は大学図書館の機能を合理的に果すことは出来ない。細分化されていく学問の進展に適応するためにも、「主題専門化」の概念を導入し、現在ある学部図書室をいくつかの学問体系即ち文科系、理工系、医学系等にまとめて部門化し、これらを中央図書館の強力な管理組織下におき、一元化された管理組織の中で、部門管理上でのプロセスを分権化するかを考える。更に受入・記述目録作業を統合化し、機械化を有効な形で導入する。大規模図書館においては、全学的に技術プロセスを一本化する事が困難であれば、各部門毎に中央図書館の協力と指示の下に整理組織を分権化することも不可能ではない。専門的に部門化された図書室は、資料整理上の高度の技術プロセスとレファレンスを統合した形の作業を分担し、大学図書館機能の「確実にして迅速な情報提供」の要請に答える情報サービスの拠点となることがのぞましい。

\* \* \* \*

昭和 45 年度の受入図書の主なものは次の通りである。

### 単行本

- Balys, Jonas comp.: Lithuania and Lithuanians; a selected bibliography. New York, c1961.
- Beer, Fritz: Die Zukunft funktioniert nach Nicht; ein Porträt der Tschechoslowakei 1948-1968. Frankfurt a. M., c1961.
- Berlin. Freie Universität. Osteuropa-Institut: Bibliographische Mitteilungen des Osteuropa Instituts an der Freien Universität Berlin. Ht. 1-2, 3 (Lief. 1-14), 4 (Teil 1-3), 5-9. Wiesbaden, 1959-1966.
- Československá akademie věd. Historický ústav: The Czech black book, prepared by the Inst. of Hist. of the Czech. Acad. of Sciences. New York & c., c1969.
- Frasheri, Kristo: The history of Albania; a brief survey. Tirana, 1964.
- Hazard, John N.: Communists and their law; a search for the common core of the legal systems of the Marxian socialist states. Chicago & London, c1969.
- Hough, Jerry F.: The Soviet prefects; the local party organs in industrial decision-making. Cambridge, Mass., 1969.

- Kadić, Ante : From Croatian renaissance to Yugoslav socialism ; essays. The Hague & Paris, 1961.
- Kuka kukin on (Aikalaiskirja). Henkilötietoja nykypolven suomalaisista. 1966. Who's who in Finland. Helsinki 1966.
- Lendvai, Paul : Eagles in cobwebs ; nationalism and communism in the Balkans. London, c1969.
- Lerner, Warren : Karl Radek ; the last internationalist. Stanford, Calif., 1970.
- Macht und Recht im kommunistischen Herrschaftssystem. Red. v. Dietrich Frenzke und Alexander Uschakow. Köln, c1965.
- Nalbandian, Louise : The Armenian revolutionary movement ; the development of Armenian political parties through the nineteenth century. Berkeley & Los Angeles, 1963.
- Remington, Robin Alison ed. : Winter in Prague ; documents on Czechoslovak communism in crisis. Cambridge, Mass., and London, c1969.
- Rigby, T.H. : Communist party membership in the U. S. S. R. 1917-1967. Princeton, N. J., 1968.
- Schwartz, Harry : Prague's 200 days ; the struggle for democracy in Czechoslovakia. New York ., c1969.
- Sturm, Rudolf : Czechoslovakia ; a bibliographic guide. Washington, 1967.
- Tomasevich, Jozo : Peasants, politics, and economic change in Yugoslavia. Stanford, Calif., 1955.
- Tugan-Baranovskii, Mikhail I. : The Russian factory in the 19th century. Homewood, Ill., c1970.
- Zinner, Paul E : Communist strategy and tactics in Czechoslovakia, 1918-48. New York & London, 1963.
- Айхенвальд, Ю. И. : Силуэты русских писатель. Том 1-3. Берлин, 1923-29.
- Виноградов, В. В. : Стиль Пушкина. Мос., 1941. [Düsseldorf, Brücken-Verlag ; Vaduz, Europe Printing Est., 1969]
- Виноградов, В. В. : Язык Пушкина ; Пушкин и история русского литературного языка. Мос. и Лнг., 1935. [Düsseldorf, Brücken-Verlag, 1969]
- Кизеветтеръ, А. А. : Историческіе очерки. Изъ истории политическихъ идей. —Школа и просвѣщеніе. —Русскій городъ въ 18 ст. —Изъ истории Россіи въ 19 ст. Мос., 1912.
- Латвийская ССР. Центральный государственный архив : Социалистическая Советская Республика Латвии в 1919 г. и иностранная интервенция : документы и материалы в двух томах. Том 1-2. Рига, 1959-60.
- Лемке, М. К. : Политические процессы в России 1860-х гг. ; по архивным документам. Изд. 2-е. Мос. и Пг., 1923. [The Hague & Paris, Mouton, 1968]
- Пыпин, А. Н. : История русской литературы. Изд. 2-е, пересмотр. и доп. Томъ 1-4. СПб., 1902-1903. [The Hague & Paris, Mouton, 1968]
- Сборникъ статей въ честь Матвѣя Кузьмича Любавскаго. При участіи : Д. Багалѣя (и др.). Пг., 1917.

《研究活動報告》

- СССР. Законы, статуты, и др.: Собрание законов и распоряжений рабоче-крестьянского правительства Союза Советских Социалистических Республик. [Часть 1] 1924–1937. Мос., [1925–38] [Montabaur, West Germany, reprinted by Auxilibris, 1968]
- СССР. Законы, статуты, и др.: Собрание постановлений и распоряжений правительства Союза Советских Социалистических Республик. 1938–1940. Мос., [1938–40] [Montabaur, West Germany, reprinted by Auxilibris, 1960–62]
- СССР. Законы, статуты, и др.: Собрание постановлений правительства Союза Советских Социалистических Республик. 1941–1949, 1957–1958. Мос., [1941–58] [Montabaur, West Germany, reprinted by Auxilibris, 1960–62]
- СССР. Центральное статистическое управление: Баланс народного хозяйства Союза ССР, 1923–24 года. Мос., 1926.
- Страхов, Н. Н.: Критическія статьи объ И. С. Тургеневѣ и Л. Н. Толстомѣ, 1862–1885. Изд. 4-е. Изданіе И. П. Матченко. Том 1. Кіевъ, 1901.
- Юшков, С. В.: Очерки по истории феодализма в Киевской Руси. Мос. и Лнг., 1939.

雜誌 (継続分を除く)

- Problems of Communism. New York & London.  
Vol. 1 (1952)–10 (1961)
- World News and Views. London.  
Vol. 18 (33–61) (1938), 19 (1–61) (1939), 20 (1–52) (1940), 21 (1–52) (1941), 22 (1–52) (1942), 23 (1–52) (1943)
- Впередь: Непериодическое Обзоріе. Лондон и Цюрих.  
Том 1 (1873)–3 (1874)
- Горос Минувшаго на Чужой Сторонѣ; Журнал Исторіи и Исторіи Литературы. Париж.  
[Новая сер.] 1 (1926)–4 (1926)
- Каторга и Ссылка; Историко-Революционній Вестник. Мос.  
№№ 50 [1] (1929)–55 [4] (1929), 62 [1] (1930)–67 [6] (1930), 80 [7] (1931)–85 [12] (1931).
- ЛЕФ; Журнал Левого Фронта Искусств. Мос. и Пг.  
№№ 1 (1923)–7 (1925)
- Русская Мысль; Журнал Научный, Литературный и Политическій. Мос.  
Том 1 (Кн. 1–3) (1880)

マイクロフィルム

単行本

- Mett, I.: La commune de Cronstadt: crépuscule sanglant des soviets. Paris, [pref. 1948].
- Zilliacus, K.: Japanesiska studier och skizzer. Helsingfors, 1896.
- Бакунин, М. А.: Избранные сочинения. Том 1, 3–5. Пг., 1919–21.
- Бакунин, М. А.: Материалы для биографии М. Бакунина по делам государст-

- венных архивов Москвы, Праги, Дрездена, Вены. Том 2. Мос. и Лнг., 1933.
- Замотинъ, П. И.: Романтизмъ двадцатыхъ годовъ XIX столетия в русской литературѣ. Том 1. Второе просмотрѣнное и дополненное изданіе. СПб. [и] Мос., 1907.
- Кирпичников, А. И.: Очерки по истории новой русской литературы. Изд. 2-е доп. Том 2. Мос., 1903.
- Максимов, В. Е.: “Современник” при Чернышевском и Добролюбова. Евгеньев-Максимов, Владислав [псевд.]. Лнг., 1936.
- Пухов, А. С.: Кронштадский мятеж в 1921 г. [Лнг.] 1931.
- Чернышевский, Н. Г.: Полное собрание сочинений в пятнадцати томах. Том 4. Мос., 1948.

雜誌

- Борьба Классов; Исторический Журнал. Лнг.  
1924 (№ 1-2)
- Литература и Марксизм; Журнал Теории и Истории Литературы. Мос.  
1928-1931.
- Проблемы Экономики. (Академия Наук СССР. Институт Экономики) Мос.  
1929-1941 (1)
- Труды Центрального Статистического Управления [СССР]. Мос.  
[1 (1920/21)-35 (2) (1927)]